安彦忠彦著「自己評価のすすめ―『自立』に向けた『自信』を育てる―」(クレイス叢書)図書文化社 2021 年 3 月 16 日刊を読む(Ⅱ)

「経験」と「体験」の違い―森有正の「経験」の重要性の指摘―

１．哲学者の森有正は、フランスでの生活を送りつつ、日本人の考え方の特徴を、フランス人など西欧人の考え方と比較しつつ、「経験」と「体験」の違いをもとにして、西欧人が「経験」というものの独自性を大切にして生活している、と指摘しています。

２．(１)森の言うことを筆者流に要約すれば、**「経験」**(ドイツ語：Erfahrung)**は、他者に対して開いていて、「体験」**(ドイツ語：Erlebnis)**は、他者に対して閉じている**というものです。
(２)つまり、「経験」のほうは、他の人と共有可能で、論理的に整理されており、常に修正・発展が起こりうるものであると言います。
(３)例えば、自分が体験してきたことの本質を、論理的に整理して「経験」として他の人に伝えることにより、その経験は他人に理解され、吟味にかけられ、より客観的な、誰もが納得するものとなり、その経験を共通の土台にして、討論もその後の経験も、いっそうの深まりを示し、歴史的な知恵を増すものであるというのです。

３．(１)一方、「体験」はその人自身の固有の意味を持つもので、深い個人的な色合いを持つという点では価値の高いものですが、他の人と分かち合うことのできない独自性を持っていて、むしろ、その個人性・独自性のゆえに一般性・共通性がなく、その人のものとして閉じていると言います。
(２)日本人は、どちらかと言えば「体験」にとらわれる方で、それを「経験」にまで高めて抽象化・論理化するという努力を、あまりしてこなかったと言ってよいのではないかと反問しています。
(３)この違いには、「経験」を「理性」と対置させた西欧の哲学界・思想界の、分析的・論理的・実証科学的なものの見方が大きく影響したと思われます。

４．(１)やや難しく聞こえたかもしれませんが、この指摘は重要だと思います。
(２)つまり、日本人は「自分の経験」である「体験」は誰もがしているが、それを「分析的に論理化し、その構造を明確化しよう」という態度に乏しいのではないかと思います。
(３)たとえ科学者であっても、それを自分の仕事にしている人は、無意識の内に「体験」を「経験」化しているわけですが、それを日常的な生活の中でも行っている日本人は、実は少ないのではないでしょうか。
(４)なぜなのでしょうか。

５．（１）それは、私見によれば、「強い自己」、「体験」を対象化して普遍的な何かを見いだそうとする「主体的自己」を持っていないからではないでしょうか。

（２）なぜ日本人は「強い自己」を持ちえないのか。

（３）それは、「体験」ばかりで、それを「経験」にまで高める「生き方」をしていないからです。

（４）逆に言えば、「自己」が「対象」に出会うという「体験」をしても、その「体験」が「対象」との「関係」の中でつくられて、ある種の「一体感」を生み、完全に突き放して対象化することがないため、「経験」の普遍性・一般性が引き出されにくいのではないかと思うのです。

（５）日本人と「自然」との関係などは、とくにそういう面が強いように思われます。

６．（１）この面では、最近の現象学的な理解や認識も無視できませんが、人間は何から何まで現象学的に認識しているわけではありません。

（２）あらためて、「体験」を自分の「経験」に高めるために、「もう一度」（すでに明治時代以来してきましたが）、「主体―客体」の原理的な関係を、「自己―モノ・コト・ヒト」という関係で、分析的・実証的・科学的にとらえ直してみる必要があるように思います。

（３）西欧の実証科学を取り入れて、その種の「経験」を積み重ねてきましたが、最近の西欧の思想界がそれを「近代主義（モダニズム）」として自己批判し、現在は「ポストモダン」の時代だとの過剰な一般化をしたために、「主体―客体」の関係が単に相対化されるだけで終わるならともかく、その関係を全面的に否定するような傾向にあることは問題です。

７．（１）「もう一度」行う必要があるというのは、今度は、そのような科学的な営みだけでなく、日常の生活の中で、「体験」を「経験」にまで高める努力を意図的にしなくてはならないということです。

（２）科学的な営みは「自然」という対象の方に関心を集中させますが、今度は逆に、「自己」の方を意識的に、一度、自然を含む他者と切り離して「中立的」に位置づけることが必要です。

（３）「経験」にはこのような「自己」が対象に向けて対置されなければ、他者と共有できる論理的なものにはならないと言えます。

P125 ～ 128

＜コメント＞

フランスに長く在住した哲学者、森有正氏の「体験」と「経験」の違いのお話を安彦先生の御著書の中で学ぶことができ嬉しく思います。

2021 年 3 月 27 日（土）林明夫